

『Mind Charging』

第 152 回 発行：入試広報室 発行日：令和 2 年 11 月 13 日

野村萬斎の名言



『職業は？』と聞かれたら 『野村萬斎』と答えたい。

能楽師、俳優という仕事は、『自分を使って表現する仕事』という非常に難しい職業であると思います。また、物語の内容をグレードアップさせることもイメージダウンさせてしまうこともあるという、責任重大な職業でもあると言えます。様々な役を演じる上で『これはやりたくない』というものもあると思います。しかしそれが“仕事だから仕方ない”というモチベーションでやりきれレベルの仕事ではないと思うことから、そういった時はどのようにしてその役と向き合うのだろうというところに非常に興味があります。また、自分自身がわからなくなることはないのかということも気になります。

この言葉を知った時に、『彼は私が抱いたような疑問を持つようなレベルの人ではない』と、大変失礼しましたとお詫びしたい気持ちになりました。この仕事に就く時点でそういった大変さを全て受け入れて歩いていく『覚悟』があったのだと思いました。そして、そのような覚悟がこの世界で戦っていくためには必要なのだということも理解できました。正にプロですね。

キレイな言い方をすれば、人生とは長編のドラマや映画のようなものであり、主演は自分自身です。なりたい自分に近づくように努力することは、『理想の自分』という役を演じていることにもなると思います。人生を送っていく中で様々なことに遭遇します。正直言って二人分の人生を同時に送る(進める)という作業は非常に困難だと思いますが、彼は仕事を『野村萬斎の人生を生きる』ということだと捉え、非常に困難な道を敢えて選んで挑戦しているのだと思います。仕事に対するプロ意識を人生に置き換えたら『責任感を持って過ごす』ということだと思います。大人と呼ばれる直前の世代であるみなさんには、一度『生き方』について考えておくべきことではないでしょうか。(編集委員：入試広報室 鈴木)

野村 萬斎(のむら まんさい、本名・野村 武司(のむら たけし)、1966年(昭和41年)4月5日 -)は狂言方泉流の能楽師、俳優。能楽狂言方泉流野村萬斎家の名跡。二世野村万作と詩人阪本若葉子の長男。狂言師・二世野村万作の長男として、東京都に生まれる。重要無形文化財総合指定者。4人兄弟姉妹の3番目で、姉・姉・妹という女性に囲まれて育った。1969年、3歳のときに『靉猿』の子ザル役で初舞台を踏み、4歳で初めて台詞のある役を『いろは』で演じる。

(Wikipedia 参照)